

7月・歴史研修会

「高見川流域から宮瀧遺跡」吉野の歴史を訪ねて

7月25日(月)参加者は27名。バスは桜井から37号線を南下して吉野川に出会う。この辺りが「宮瀧」の集落である。車中で川井さんは、「十津川村は、南朝や天誅組に加勢した、日本で最も勤王の志が篤い土地といわれている。」と、思い入れのある話をされた。

「吉野歴史資料館」を訪れた。パネルの説明によると、ここで縄文・弥生時代の土器が発掘されたが、稲の穂摘みの石包丁が出土せず弥生時代になっても稲作の形跡がない。その為か後期には、人々はこの地を離れたという。飛鳥時代に斉明天皇が造営した「吉野宮」の遺構が、その隣に奈良時代に聖武天皇が造った「吉野離宮」の建物跡が発掘された。遺構は埋め戻されて、石碑と説明板のみが建っており発掘の面影は見られない。吉野宮は大海人皇子が壬申の乱で蜂起した場所である。

吉野は大塔宮護良親王が討幕に立ち上り、後醍醐天皇は足利尊氏の反乱を逃れて南朝を樹立している。「歌書よりも軍書に悲し吉野山」と詠われた。

柴橋の展望台から遺跡の横を流れる吉野川を見下ろす。上流の大滝ダムの流量調整で水量が少なく、万葉集や懐風藻に詠われた「千尋の素涛、落ち激る滝、水滾(たぎ)る溪谷」は想像できない。

「森と水の源流館」を見学する。ここ川上村は吉野川源流の三之谷谷原生林740㊦を買取り、「水源地の森」として守り育てる活動の拠点となっている。青空が拡がり始めた。ここで昼食。

高台に移設された「丹生川上神社上社」を訪ねる。「西の大滝、東の八ッ場」とずさんな公共工事の象徴とされた「大滝ダム」。水没前の発掘調査で本殿基壇の下から縄文から弥生時代に及ぶ環状列石が確認さ



れた。「宮の平遺跡」である。この場所には、奈良時代に祭祀に関わる集石遺構が造られ、江戸時代まで社殿の造営など約6回の改築が行われた。

763年に続日本記に記された「丹生川上神社」は上社であろう。初見から応仁の乱の頃まで、祈雨止雨の神として書物に記載されている。

本殿前には狛犬の代わりに躍動感のある2頭の銅馬が侍り、本殿内には祈雨止雨を願う絵馬が掲げられている。絵馬は生きた馬の代わりに馬の絵を奉納したのを語源とする。

次に高見川を遡り、鷲家で散った天誅組義士と彦根藩士の菩提寺「宝泉寺」に立ち寄った。境内で川井さんは、王政復古を目指し討幕に立ち上がりながら、たった1日で逆賊となった悲劇の天誅義士について熱く語られた。この地で倒れた義士たちは湯の谷墓地に埋葬され、宝泉寺などの地元の寺で、村人によって篤く供養されている。

さらに上流の「丹生川上神社中社」に参拝する。日本書紀や続記には雨乞いの神として記載あり、国家レベルの祈雨の祭祀の場所となっていた。樹齢千年の杉の巨樹が直立する境内には厳かな雰囲気漂っている。緑陰に鎮座する社には水の神「罔象女神」が祀られている。社の周辺にはヤマユリ(吉野百合)が芳香を放ち、ツクバネの花、ツルマンリョウも見られた。

吉野は天皇や大官人にとってどのような場所だったのであろうか。応神天皇以来、雄略、斉明、天武、持統、元正、聖武の各朝に亘って度々の行幸があり、中でも持統は32回も訪問している。恒久的な宮や離宮を造っていたと思われる。

「万葉集」や漢詩集「懐風藻」などの歌には吉野を褒め称え、山紫水明・風光明媚な吉野の風土を、神仙境と歌いあげている。天皇にとっては祈雨止雨の祭祀は重要な責務であり、随行の大官人にとっては憧れの地であつたに違いない。

「やはた温泉」で汗を流し、アユの塩焼きと生ビール、絶妙の取り合わせで至福の時間を楽しみ帰途についた。俳句の聖地「原石鼎庵」を見過ごしてしまい、残念ながら立ち寄れなかった。

「岩藻みな立ちて揺れ居る清水かな」(原石鼎)

歴史クラブ 中井弘